

時制・耐続・生成

——コプラを深く時制化する——

加地 大介 (Daisuke Kachi)
埼玉大学

物的対象における通時的同一性と内在的変化はいかなる意味で両立可能なのかを問う「内在的変化の問題(the problem of intrinsic change)」に対しては、互いに対立し合う存在論的立場からいくつかの対処方法が提示されている。その中で、時点指示を属性への副詞的修飾へと転化することにその眼目を見出された結果として「副詞主義(Adverbialism)」と呼ばれることの多い、ジョンストン (M. Johnston) やヴァン・インワーゲン(P. van Inwagen)らの方法に対しては、同時にしばしば、コプラの時制化や例示関係の時点相対化など、いくつかの異なる特徴づけがなされる。また彼らの副詞主義は、「現在主義(presentism)」に対抗する「永遠主義(eternalism)」に基づいて、「延続主義(perdurantism)」に対抗する「耐続主義(endurantism)」を正当化する方法として位置づけられることも多い。

提題者は、彼ら（特にジョンストン）の方法の核心をコプラの時制化に見出したうえで、耐続主義を擁護するための基本的方針としてそれを支持する。しかし、彼らが内在的変化に伴う矛盾の回避という目的に集中するあまり、コプラの時制化よりも時点指示の副詞化に強調点を置いたこと、また、（特にヴァン・インワーゲンにおいて）コプラそのものの捉え方に問題があることなどが、いくつかの不十分さ・曖昧さや混乱のもととなっていると考える。さらにこの方法は、必ずしも現在主義ではないにしても、時制を存在論的に重視する「深い時制化(serious tensing)」のひとつの形として捉えられるべきであり、本来は永遠主義にむしろ対立する方向性の中に位置づけられるべきだと思われる。

本提題ではまず、耐続に由来する独特のコプラ的 de re 様相として時制を捉えることにより、ジョンストンらよりも「深い」形でのコプラの時制化を行う。それに基づきつつ、さらに「貫世界同一性(transworld identity)」の概念やテイラー(R. Taylor)の「純粹生成(pure becoming)」の概念をも援用することにより、時制主義・耐続主義・生成主義をできるだけ本源的かつ一体的に擁護することを試みる。

以上のような提題内容は、「夢」に関する哲学的問題に直接的にはつながりにくいですが、「生成」が深く関わる（一種の「多世界」としての）「多時点」間における同一性として物的対象の通時的同一性を捉えることになる点において、渡辺氏の「転生」や三浦氏の「多世界解釈を前提とした自己同一性」との何らかの接点を見出し得るのではないかと期待している。